

理事に就任して

株式会社ダイヤコンサルタント 東北支社長

山浦 昌之



はじめに

令和2年4月に齋藤勝の後任として、東北地質調査業協会の理事に就任いたしました株式会社ダイヤコンサルタント東北支社の山浦です。

東北での勤務は初めてで、東日本大震災から来年で10年を迎える中で様々な活動に関わらせて頂けるものと胸を膨らませながら赴任して参りました。まさか、4月早々の緊急事態宣言発令で暫く仙台市からも出ることもできない日々を過ごすことになるとは想像さえもしておりませんでした。

今年はコロナ禍で協会活動への参加もままならない状況ではありますが、協会活動を通して地域貢献に取り組んで参る所存ですので何卒よろしくお願い致します。

自己紹介

出身は長野県松本市になります。山登りをされる方であれば訪れたことがあるかもしれませんが、「北アルプスの玄関口」ともいわれている場所です。国宝松本城をシンボルに上高地や美ヶ原高原を望み、蔵造りやレトロな和洋折衷様式の建物が随所に残るノスタルジックな町並みが魅力的な城下町です。



松本城（松本城HPより）

松本の郷土料理のひとつに「とうじ蕎麦」があります。「とうじ」とは「投じ」と書き、汁に浸して温めることを意味します。小盛りしたそばをとうじ籠に入れ、旬の山菜やきのこ、野菜を煮たてた大鍋の中に浸し、さっと湯がいていただきます。蕎麦アレルギーでさえなければ、季節を問

わずに楽しむことができる料理です。私のおすすめは「野麦路」というお店です。松本に足を運ぶ機会がありましたら、お店をググって、是非ご堪能ください。



とうじ蕎麦（日本アルプス観光連盟HPより）

高校生までは3,000m級の山に囲まれながらの生活で、「あの山の向こうには、どんな華やかな街があるのだろう……」と思いを馳せながら過ごしていました。

海なし県であったにも関わらず泳ぐことが大好きで小学2年生の頃にスイミング・クラブに入ってから高校卒業までは水泳に没頭する毎日でした。最盛期には1日8時間以上泳ぐ日々を過ごしていました。その頃は歩くような感覚で泳いでいて、ある程度のスピードであれば、いつまでも泳ぎ続けていられたことを今でも覚えています（今は、25m泳いただけで息が上がってしまいますが……）。

大学からは東京で生活することになりました（……と言うか、何としても東京でキャンパスライフを送りたいという野望を果たしました）。右も左も分らない中で選んだアパートが、偶然にも白百合女子大という超お嬢様学校の目の前で（住み始めてから気付いたのですが）、突然、別世界の人達を目の当たりにしたように思いました。入学試験の日には、黒塗りのベンツが学校の前にずらっと並んでいて圧巻だった様子を今でも鮮明に覚えています。学園祭の際には大学の悪友と共にキャンパス内に潜入してお嬢様とお近づきになろうとしましたが、残念ながら縁遠いままに終わってしまいました。

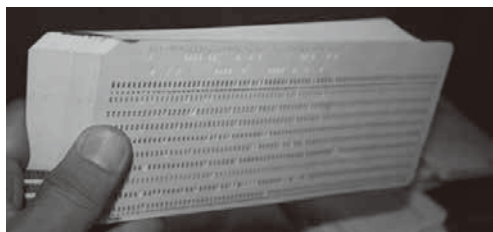
大学時代は土木工学を専攻していました。研究室では、1980年代当時では珍

しい「数値シミュレーション」を専門に扱っていました。今では一般的に使われている有限要素法(FEM)という手法を使って、河川の河床洗掘問題を一生懸命(だったかな?)計算していました。当時のPCの性能は、現在の電卓ほどの能力も無かったため、大型コンピューター(今でいう「富岳」というようなコンピューターの部類)を使って「数値シミュレーション」をすることが主流でした。



大型コンピューターの例 (CDC)

当時は、「パンチカード」という紙のカードにタイプライターのような機械を使って一枚一行に相当する計算プログラムとデータを打ち込み、カードリーダーを使って読み込ませるといった方法で計算を実行していました(こんな説明でイメージが伝わりましたでしょうか……)。とにかく、ちょっとした計算にも途方もない時間を要した時代でした。



パンチカード (オープンメディアブログより)

その後、平成の幕開けと共に社会生活が始まり、気が付けば今の会社に三十年以上もお世話になっています。入社当初は、地質屋さんとの時間スケールの感覚の違いに新鮮な驚きを感じていました(土木工学で、何十万年という時間スケールを議論する機会は殆どありませんでしたので……)。入社してからは、「阪神淡路大震災」後には斜面防災関連業務、「東日本大震災」後には津波や液状化を対象とした防災関連業務と、防災絡みの業務に関わることが多かったように思います。

その間にIT(情報技術)は目まぐるしい進歩を遂げ、“Windows95の出現によるPCの普及”、“インターネットとスマートフォンの普及”、“AI技術の実用化”と今やICT(情報通信技術)と総称される

までに至りました。私が入社した頃は、ごく限られた職員がPCを扱っていましたが、今は、一人一台どころか複数台のPCやタブレット端末を扱うのが当たり前になっています。

これからの業界の発展に向けて

これからの地質調査業界の発展に向けて思う事としては、「技術の確実な伝承」と「より効率的で分かり易い成果品の提供」があります。前者については「AI技術の活用」が挙げられ、後者については「デジタルツインの創出」が挙げられます。このような技術革新を一刻も早く実現する必要があると感じています。また、これらの技術革新を単独の企業で推し進めるのには限界があり、地質調査業界としての取り組みが必要と感じています。

紙面の都合から具体的な考えを記すことはできませんが、またの機会にお伝えできればと思います。地質調査業界においても社会の変革に応じて、常に技術革新に取り組むことが必要と感じています。

おわりに

「時間外労働の上限規制」、「有給休暇の消化義務」、「同一労働同一賃金制度の推進」といった一連の働き方改革関連法案の施行により、労務管理のスタイルも大きな変革時期を迎えています。私のような古いタイプの間人は(それでも、入社当初は「新人類」と揶揄されていた世代ですが……)、今までの働き方を顧みて、このような制度改革は非現実的なものではないかと考えてしまいがちです。

一方で、私が新入社員だった三十数年前と今との喫煙環境を比べた時に、世の中は常に変革するものとしみじみ実感します。当時は、オフィス内の自席での喫煙はおろか、駅のホームでも飛行機や電車の中でも普通に喫煙が許されていました。それが今のような状況になるとは想像さえできませんでした。そう考えると、このような新たな労務管理の中で仕事を進めて行くことが当たり前になって行くのだと素直に受け入れられます。技術に関しても常に変革が求められていて、それを受け入れて行く必要があると感じています。

2020年の流行語大賞が「三密」であったように密接になることが避けられる世の中ではありますが、地質調査業協会としては密接に協力し合いながら発展していければと願う次第です。微力ではありますが、協会の発展に貢献できるよう努力する所存ですので、ご指導・ご鞭撻のほどよろしくお願い致します。